
A Forked Road

八神 直斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A Forked Road

【Zコード】

Z5343E

【作者名】

八神 直斗

【あらすじ】

高校受験を控えた侑希たちに、避けられない別れが迫る。いつまでも友達。その言葉が繋ぐ絆。しかし侑希は、完全なる別れを決意するが……。

きっかけ

この世の中でもっとも強い人間は
孤独に耐えられる人間である

ヘンリック・イブセン

私はいつも独りだつた。友達と呼べる友達もいなくて、もちろん彼氏なんてもつてのほか。いや、友達はいるか。私が無理やり関わることをやめただけで。

中学の時にはいつも10人近くの友達と一緒にいた。休み時間になつたら他愛のない話をして笑いあつて、毎日が楽しかつた。

いつからだろうか、私が彼女たちと関わらないように必死になり始めたのは・・・。 そうだ、あの時だ。それは私が高校受験で一人違う学校に進学しようと決めたとき・・・。

「え？ 侑希は寺大てらだい行くの？」

中学3年の夏休み。私たちは部活で学校の美術棟にいた。夏休み明けにある文化祭の出し物として、私たち美術部は個人、もしくは数人のグループで展示をすることになっていた。私は仲のいい5人で集まつて、展示物を創つていた。

朝から学校に集まつて、午前中は体育祭の看板、オブジェ、ポスター作り。午後は展示物の制作に取り掛かることになつていて。今は午後の活動の準備のための中休み。つまり、昼食時間。5人とも昼食を取り終え、雑談をしていた。しかし、中学3年生の会話にはやっぱり進路の話が入つてくる。私たちもそれに漏れることなく進路の話題が持ち上がつた。

友達のほとんどは、地元のさして学力の高くない高校、高邑高校たがひこうに進学すると言つていた中で、私ともう一人の子はみんなと違う高校に進学を決めていた。

寺大てらだいとは高校の名前で、私の地元のなかで、三本の指に入る名門校。私は将来医者になろうと思っていたので、友達のほとんどが行こうとしている高校では、少し辛いものがあるだろうと、みんなと一緒に同じ学校で高校生活を送ることを諦めた。

■元ひみたきに急に電話を振られたことで、少し肩を揺らして少し困ったように

「うん。みんなは高田^{たかだ}ですか？」

「やうだなじやー。あー、でも俺希^わは医者^{いしゃ}になりたいんだもんね。
高田^{たかだ}やじやー？」

「・・・・・ そだね」

「佳代^{よしよ}は ちやじや じゃないんだよな？」

「私は・・・・・ 富^み一^や一^こ かな」

う彼女は佳代。私たちの中でもしつかり者の方に入る。

「佳代の将来の夢って何?」

「私ね、社会の先生になりたい」

少しきょとんとして答えた佳代に、彼女たちはそうなんだ。と頷いた。本人は何でもないように装っていたが、私には佳代が何か決心をしたように見えた。開き直ったように、何かを投げたように、凛として答えていた彼女を私は初めて見た。そしてどこか、悲しそうにも見えた。

To
Be
Con
tin
ued
.
.
.

始まり

その日の帰り道、美咲と佳代と私は、別れ道で固まって話をしていた。

美咲は副部長と言つゝともあって、部活の話から他愛ない話まで、気の済むまで喋つた。

「侑希、寺大について色々教えて」

暫く話をした後、突然美咲が言い出した。すると佳代があ、と声を上げた。

「私、塾あるからもう帰るね」

「ばいばーい」と手をふつて帰つて行く佳代。私たちは佳代が見えなくなるまで見送つた。すると美咲が真剣な顔で私に言った。

「侑希、私さ、変なところでカンがいいの知つてるよね?」

「うん、知ってるけど……」

「佳代について何か知ってるよね？教えて」

美咲は確かに鋭かった。特に無理に何でもないよう振る舞う友達を見分けるのが。私が知っている事は何もない。ただ私も感づいただけだ。今の美咲のように。

「何も知らないよ。何も聞いてないもん」

「嘘。絶対知ってるよね」

「知らないよ、何も」

美咲は暫く私を見つめていた。

私はなんとなく決まりが悪くて、俯いていた。

美咲は何か思いついたのか、ちょっと待つてて。と私に言いおいて自分の家に入つて行つた。

そのまま帰つてしまおうかと思っていたが、私が決意するよりも早く美咲が戻つてきた。

「侑希。今日何にも用事なんてないよね？」

「うん。 ないけど・・・・・何？」

「ちょっと私の部屋でお話しそうね。ついでに夕飯も食べてって。
それから明日部活でも登校日でもないよね？何なら泊まつてけ」

満面の笑みで一気にまくし立てられ、じくじくと首を縦に振ることしか出来なかつた。

美咲のお母さんに挨拶をして、さっさと部屋に招き入れられる。
私は電話を借りて家に電話をした。後で、母が挨拶もかねて着替えを持ってきてくれたことになつた。

美咲は着替えを済ませ、二人でベッドに並んで座つた。暫く沈黙が続いたが、先に口を開いたのは美咲だつた。

「ほんとに知らないにしても、何か気づいたことくらいはあるんでしょ？」

やつぱり勘が鋭いだけはある。確かに私は佳代から何も聞いてない。ただ、彼女の言動と雰囲気からなんとなく察しただけの、確信に近い憶測だけはあった。

あの子は何か無駄な心配をしていて、何かに怯えている。以前の彼女なら怯える必要のなかつた何かに。

しかし、憶測だけで言ってしまえば美咲に余計な心配をかけてしまつ。私は、どう答えよつか迷つていた。

「ねえ、侑希？」

「憶測でこんなことを言つのは気が引けるんだけど……。佳代、何かいらない心配してると思うの。それから、何かに怯えている様にも見える。入試なんて関係なかつた頃の佳代だったら、私は関係ないって言い張れるようなことで……。あー、何言つてるか分かんなくなってきたけどなんとなく、でも高い確率でそう思つの！」

思つていたことを一気に言い終わつた私は、美咲の顔を見る事が出来ずについた。

私は、ずっと黙つてゐる美咲の顔を恐る恐る覗いてみた。

「美咲…………？私何かへんな事言つた…………？」

「侑希…………。あんた、だから怖がられるんだよ…………」

「…………っえ？」

To
Be
Con
tin
ued
.
.
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5343e/>

A Forked Road

2010年10月8日13時31分発行